

令和5年度事業

困難を抱える女性が安心して暮らせる六甲ウィメンズハウス
先進地事例調査報告書

＜北九州市・認定非営利活動法人 抱樸＞

2023年4月19～20日

公益財団法人 神戸学生青年センター 理事長 飛田雄一

目次

1. 先進地事例調査概要

(1) スケジュール.....p.3

(2) 参加者名簿.....p.3

2. 調査報告

(1) ホームレス自立支援センター.....p.4

(2) プラザ抱樸.....p.5

(3) きぼうのまち予定地.....p.6

(4) 東八幡キリスト教教会.....p.6

3. 抱樸の支援と六甲ウィメンズハウス.....p.7

1. 先進地事例調査概要

(1) スケジュール

2023/04/19~20

〈ヒアリング対象者〉	〈調査員〉
認定非営利活動法人 抱樸：奥田知志さん 認定非営利活動法人 抱樸：山田耕司さん	ウィメンズネットこうべ：正井 ウィメンズネットこうべ：梅澤 神戸学生青年センター：飛田 人・まち・住まい研究所：浅見 人・まち・住まい研究所：溝呂木 近畿大学：寺川 近畿大学院生：天野 神戸大学 学部生：坂田

(2) 参加者名簿

飛田雄一	公益財団法人 神戸学生青年センター理事長
正井禮子	認定 NPO 法人女性と子ども支援センター ウィメンズネット・こうべ 代表理事
梅澤昌子	認定 NPO 法人女性と子ども支援センター ウィメンズネット・こうべ
浅見雅之	合同会社人・まち・住まい研究所 代表社員
溝呂木百合	合同会社人・まち・住まい研究所
寺川政司	近畿大学建築学部建築学科 地域マネジメント 研究室 准教授 (自費参加)
天野明日香	近畿大学建築学部建築学科 大学院生(自費参 加)
坂田美優	神戸大学 国際人間科学部 学部生 (5月～ウィ メンズハウス補助スタッフとして参加予定)

2. 調査報告

(1) ホームレス自立支援センター

住所：福岡県北九州市小倉北区大門1丁目6-48

対応者：山田氏

・大きな施設を持つことを契機に、抱樸は社会福祉法人を設立（固定資産税などの税金優遇がある）。

・北九州は、低廉な価格の入居可能住宅が十分にあったり、「自立支援居宅協力者の会」という不動産業者との充実した連携体制がある。住める場所がない、ということは起きないという点で、神戸近辺とは状況が大きく異なる。

各個室は壁ではなく間仕切りであることや、狭小であることもあって、自立支援センターの利用は本当に切羽詰まった状況での一時的な居住に限られている。

・団体が手広く手がける様々な事業の事業所がここに集まっている。支援者が部屋を借りる際の保証人となることなどについても、物理的な場がこのセンター内に公に存在することによって生じる信頼があるとのこと。伴走型支援、長期的な関係性づくりをしているからこそ、保証人確保ができない人への保証人提供なども可能になっている。



(2) プラザ抱樸

住所：福岡県北九州市八幡東区荒生田2丁目1-32 シティーコーポ七条

対応者：山田氏

- ・ 専門知識が必要なケアは特に人員確保が大変、単なるアルバイトでは難しい。その点の苦勞が見られる。
- ・ 障害者・元ホームレス・高齢者・元々住んでいた人など、様々な属性の人が階によって分けたりなどもなく、全くの「ごちゃまぜ」に住んでいる。
- ・ 個室型であることは利用者から喜ばれるが、グループホーム以外の入居者は特に、入居者同士の繋がりをつくるのが難しい。入居者が多数であることや、入居者同士の騒音クレーム問題の軟化のためにも、対職員以外のつながりが必要。
- ・ 日常生活支援住居施設としての運用については、更生保護などの入居者を受け入れることによって収益性を確保している。
- ・ 家賃振り込みについて、保証会社との契約は、利用者が高齢であることもあり、システムを使いこなせないために余計に手間がかかったりする。

■調査の成果

- ・ スタッフの男女比率をどうするかについて
抱樸においては男性スタッフの需要が高いが、これは外部に対する防犯対策などというよりは、比率としても格段に多い男性利用者との間での性的・暴力的な危害が生じることを案じた配慮が理由とのことなので、利用者が女性のためのウィメンズハウスにおいては男性スタッフの必要性が特別あるわけでは無いと感じた。
- ・ 居住対象者の絞り方を検討する必要がある。
- ・ 居住者同士の関係づくりをどこまで運営側が行うことが可能なのかを検討する必要がある。共有スペースがあるだけでは不十分。



(3) きぼうのまち予定地

住所：福岡県北九州市八幡東区東鉄町7-11

対応者：山田氏

- ・建設予定地はまちの中にあることから、地域住民と良好な関係を結ぶことが必須になる。一方でホームレスは地域から排除されてきたひとびとである。そのような難しさがあるため、コミュニティデザインの専門家に入ってもらい、丁寧な設計を行っている。
- ・「助けて」と気軽に言い合える環境づくり



(4) 東八幡キリスト教教会

住所：福岡県北九州市八幡東区荒生田2丁目1-40

対応者：奥田氏

- ・「家族的機能の社会化」
家族も、つながりも、少数精鋭ではなく、量を多くすることによって一定の質を担保する、という考え方。
- ・お葬式や日々の集いなど、互助会としての機能を担う場。
- ・「伴走型支援」の考え方に基づくと、住宅はライフスタイルによって変化していくものであるため、「支援つき住宅」ではなく、「住宅つき支援」であると考えている
- ・全ての事業を抱僕が一挙に行っているというところが特徴。進展が速いことや、方法や考え方の一致が比較的容易であることなど、メリットも多く見受けられる。

ウィメンズハウスは学生青年センター・ウィメンズネット神戸・コープこうべなど、様々なステイクホルダーが関与しているという点で大きく異なるが、それらに限らず地域住民や各団体のこれまでの活動で形成してきたネットワークをいかに上手く活用するのか、が重要になる。



3. 抱樸の支援と六甲ウィメンズハウス

【なぜ抱樸なのか】

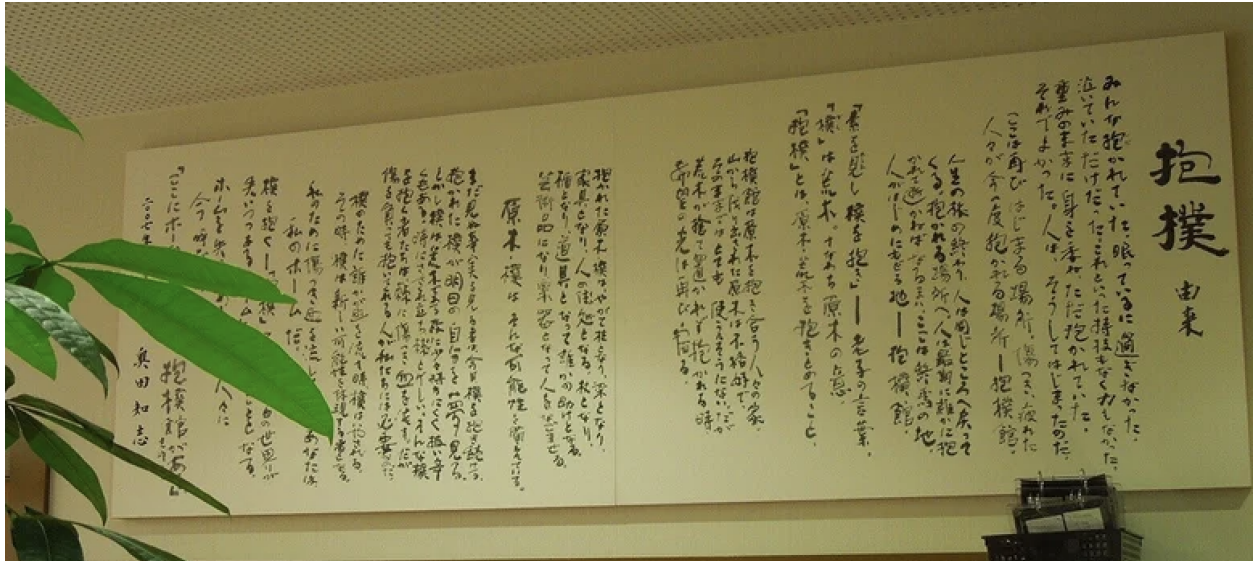
2回目の先進事例調査に北九州の「抱樸」を選んだのは、1) NPOによる大型の低所得者・困窮者向け支援つき居住施設の運営 2) 長期的な伴走型支援の実施 の二点を行っている全国でも数少ない非営利団体であるのが理由である。小規模なシェアハウスを運営するNPOは数多くあるが、40戸という六甲ウィメンズハウス (RWH)の規模を超えるものはなかなかなく、一方で大規模な無料低額宿泊所を運営する事業所には、NPOの精神で運営されているものがほとんど見受けられない。結果、この切り口での調査先として「抱樸」を選択した。

訪問に先立って、2022年7月には抱樸：山田氏と、RWH: 溝呂木、梅澤でZoomミーティングを行ない、近隣住民との関係性が重要であること、夜勤のスタッフを常駐させるのは非常に難しいことなど、改修から募集、入居までのスケジュールなど、氏の経験に基づいたアドバイスをいただいた。また、訪問前と後にRWHチームでミーティングを行い、事前学習と振り返りの機会をもった。

【ホームレス自立支援センター】

訪問当日は最初に、抱樸が北九州市から委託を受けて運営を行っているホームレス自立支援センターを訪問した。建物の作りや設備は、民間のNPOというよりも公営の古い救護施設であ

るが、随所に「抱樸」の理念が掲げられ、抱樸の黒いTシャツを来た大勢のスタッフが忙しく働いている。団体としての理念が隅々に浸透している実感があり、その点にまず感心した。



山田氏から団体概要についてレクチャーを受けたあと、施設を見学。六甲ウィメンズハウスの支援対象者とは異なるが、参加メンバーの中には夜まわりボランティアなど、ホームレス支援に関わっていた者が何名かおり、野宿者支援における神戸と北九州の地域性による違いなどについて話が弾んだ。「ホームレス」支援センターとなっではいるが、実際は居宅に入っている人も含めた困窮者、低所得者のための福祉の一大拠点であり、2Fの一時保護施設だけでなく、保証人提供を含む居住支援、就労支援から看護師の派遣まで、ワンストップで対応できる体制を整えている点に圧倒された。

【プラザ抱樸】

今回の視察のハイライトがこの「プラザ抱樸」である。NPOが主体となって運営する困窮者・低所得者向け居住施設としては全国でも最大級の99室であり、40室と比較的規模の大きい六甲ウィメンズハウスの2倍以上である。丸ごと一つの建物を改修して運営しているという点でも、六甲ウィメンズハウスと共通している。

居宅（ワンルームマンション）やグループホームの事務所、食堂などを見学させていただいたあと、再度山田氏を囲み、主に運営について質問した。

プラザ抱樸は日常生活支援つき住居（厚生労働省）、障がい者のグループホーム、一般賃貸の入居者へのサブリースの差益でサポート経費を確保。管理人が常駐し、さらにオリコとの連

携で保証人の確保も行っている。単身で生活可能だが、日常的な見守りを必要な人であれば、入居を決して断らない。

若い女性のサポートの難しさについても話題が出たが、総じて、六甲ウィメンズハウスよりもさらに支援が難しい対象を、制度を何重にも使ってサポートする体制を構築している。しかし、それでも、緊急時に動くのは山田氏などのコアスタッフであり、人的資源に依っている点に難しさを感じた。

【きぼうのまち予定地】

第一印象は、「こんなに小さなところだったのか」である。ネットや講演会で流されるイメージ動画のスケールより実際は小さい。逆に言うと、スケールの大きな、人々の希望になるようなものを作っている、と言うイメージ戦略（広報）は成功していると言える。

山田氏からはエピソードとして、工藤会の跡地であることから、住民や世間の理解を得るのに大変苦労したという話を聞かされた。そもそも、それ以前から、ホームレス支援に対しての風当たりは強く、反対運動が激しかったという。住民や自治会に最初から受け入れられている六甲ウィメンズハウスが幸運なケースであることを痛感した。

なお、山田氏の話は、炊き出しのボランティアから叩き上げてきた、あくまで現場の責任者としての意見や考えであるという点が徹底していた。二日目の奥田氏の「理念」「宗教」「社会」といった、やや抽象的な概念も踏まえての話とは対照的であり、参加者からは「両者の話を聞いてよかった」という声が相次いだ。

【東八幡キリスト教教会】

二日目は奥田氏の案内で、抱樸の理念を中心に、団体の歴史と切れ目のない支援について説明を聞いた。名前の由来、長い時間をかけてスタッフと話し合い団体名を決定したこと。キリスト者としての考え方、北九州市との関わり、家族機能の社会化について、30年に及ぶホームレス支援、「大きな家族」を目指す互助会のことなど、話題は多岐に渡り、予定の2時間半は瞬く間に過ぎた。

最後に見学した納骨堂は圧巻であった。身寄りのない人の遺骨100人分以上が収められた大きな壺が地下に埋められている。その部屋の壁全体が有料の一般の方の納骨スペースである。人を最後まで見捨てない、という団体としての姿勢が立ち現れた空間であった。

【訪問を終えて】

実際に訪問して学んだことは、各施設ごとに上記の通りである。全体としては、1) NPOとしては大きな団体ではあるが、実際に動かしているのは精鋭のコアスタッフと、それを支える

大勢のボランティア及び周辺のスタッフであること。2) 「抱樸」の理念がそれぞれの拠点の隅々にまで浸透していること。そのためのスタッフ・ボランティア間の話し合いの時間を惜しんでいないこと 3) 広報、ファンドレイズの巧みさ。発信力の強さ。4) キリスト教の精神に裏打ちされた失敗を恐れない強さ が、印象的であった。RWHに比べて規模は大きいですが、キリスト教精神以外は1)～4) ともに取り入れることが可能なものであり、特に1)と3)についてはRWHに応用できる可能性が感じられた。

有給スタッフ100人以上が20以上の事業に取り組み、キリスト教精神を元に家族的機能を丸ごと引き受けようとする抱樸と、スタッフ10名弱～20名程度のに団体がコンソーシアムを組み、ジェンダー平等の視座に立ち、短期（数年程度）の居住・就労の支援を目指すRWHという違いはあるが、支援つき住宅というよりも、支援があってこそその住宅である「住宅つき支援」であるという根本は共通している。厚生労働省の日常生活支援つき住居施設、ピアサポート的な互助会制度などの導入については調査後、アクションを起こし、行政との話し合いを始めている。今後も、あくまで大切なのは「人」であり、「入居後の支援」であるという基本を揺るがすことなく、プロジェクトを進めていきたい。

